

センター通信

欧州・伯国聖州行状備忘録

——二〇〇八年夏季より秋季にいたる

ブラジル日本移民百年関連事業および、サン・パウロ大学他での国際研究協力事業報告に代えて

（「点検評価」 対応書類？あるいは役立たず逆効果の典型例？）

稲賀 繁美

1

パリからの夜行飛行機でサン・パウロに到着したのは、二〇〇八年九月二日の早朝だった。それに先立ち、八月一杯、夏の欧州で会合に追われてきた。まず、その一ヶ月の旅

程を復元するところから始めたい。欧州渡航費用とブレイメン・パリの片道運賃には、所長裁量経費による補助を得た。その最低限の報告義務も果たしたい。八月三日にブレイメンに着き、翌朝からは国際比較文学会 ICLA 理事会。六日からは同学会主宰になる学会「儀礼よりロマンスへ」にて発表と討議。理事会の中心議題は、二〇一〇年に韓国の大邱で予定される国際比較文学会の準備だが、欧州側の会長と韓国側の実行委員長とのあいだの意思疎通がままならず、間に挟まって調整に苦勞する日々だった（大会開催地はその後、ソウルに変更となり、後日これでさらにひと悶着）。続く学会は、なにしろ世界中からやってきた学会理事や、理事会を引退した名誉教授が目白押し。自他ともに認める一流の学者揃い踏み、学芸会という体裁で、実際には理事各位の力量が、

欧米基準で値踏みされる。英語やフランス語に妙技を見せる熟達の母語使用者に立ち混じって、アジアからの参加者も遜色ない発表をせねばならない。並の国際学会とはまた一段状況が違った、熾烈な競争の場であった。この学会の記録は、ちかぢか刊行の予定なので、ここではその逐一は省略する。

八月七日には質疑応答の続くヤコブス大学会場を途中で抜け出し、パリに飛び、空港からそのまま、パリ市の南方、フォンテーヌブローに近いブレバの城に直行。昨年に日文研の客員であった、フレデリック・ジラルド Frédéric Girard 極東学院院长が組織した「第二回国際華厳学会」に途中より遅刻して参加した恰好である。もよりの郊外電車の駅に降りたが、ロッカーもなければ電話もない無人駅には、もとよりタクシーも存在しない。三ヶ月分の機材が詰った荷物を引きずりながら、あて推量に徒歩で会場を探すうちに、運よく途中で、偶々スケッチに勤しんでおられる日本人の女性に出会って、文字通り救われた。参加者のおひとり、山中康裕教授の奥様だった。

会場に着いてみると、日本から有力な仏教学者が多数参加され、欧米からの参加者と通訳もないまま複数言語で渡りあっている。専門家の先生方が、暗誦されている仏典などを

2

パリで三日ほど資料調査に費やし、一四日にはフィンランドに飛び、翌朝よりユウスクラ大学での、アジア研究博士課程夏季大学に参加。本年度の主宰責任者は、元日文研客員教授のペッカ・コルホネン Pekka Korhonen 先生。オックスフォード大学の、中国美術史研究の俊英にして泰斗、クレイグ・クルナス Craig Cunas 教授とともに、特別講演者のひとりとして招聘された次第である。クルナスは前から一度会いたいと思っていた同業者で、ちょうど『明代中国の庭園文化』が中野美代子・中島健訳で日本語でも出版されたばかりのところだった。大学の会場と宿舍との往復で随分会話を交わしたが、エドガー・ヴィントとアーネスト・ゴンブリックとのヴァールブルク解釈を巡る確執の裏に、万年講師に甘んじたヴィントの不遇のあったことなど、外からは伺い知れぬ学界内情を現場目撃者から得たのは貴重だった。この夏季大学には日本から留学中の参加者（竹内洋教授令嬢）もあり、彼女の発表を含む学生諸君との質疑応答も極めて充実。院生諸君の参加を奨励したい。

週末は、香港から定例参加の組織者、香港城市大学 Joseph 鄭宇頌教授夫妻ともども、ペッカ家で自宅サウナ付

立て板に水で引用されたりすると、素人の当方には、日本語発表ですら、というか日本語発表のほうがかえって聞き取れない。これが欧州の学会？と面喰らった。日本からの参加者には、東大寺長老の森本公誠、国際仏教大学院大学学長・木村清孝ほか、当方の旧知の方にも、四国大学大学院研究科長・真鍋俊照はじめ、東洋大学・竹村牧男、武蔵野美術大学・朴亨国ほかの方々があつた。仏教教学と仏教美術とに大きく話題が大別された個々の発表の細部は、これも現在論文集が編集中等であるため、ここでは割愛するが、精神医学の山中教授は、今回の会議のために初めて華厳経を通読されたばかりか、すべて写経されたうえで会議に臨み、精神分析と華厳との関係を説かれ、満場の喝采を浴びた。

他方、当方がジラル先生から頂戴したのは、「現代美術と華厳経」という無理難題。だがこの突拍子もないお題のお陰で、南方熊楠から井筒俊彦を繋ぐ思索のうえに田中敦子から草間弥生、工藤哲巳から塩田千春、赤瀬川原平から関根伸夫といった芸術家の営みを考察する、思いもよらぬ視野が開ける結果となった。宿泊施設は、小規模な学術会議には最適な環境であり、パリへの帰路も一緒で来た山中教授ご夫妻とは、故河合隼雄先生の思い出など、貴重な会話を交わす機会が得られた。

きのもてなしを受け、東の間の休日。一九日には再度パリに飛ぶ。日中は資料調査、夜は去年アカデミー会員に選出されたロベール Jean-Noël Robert 教授はかの旧友と情報交換の傍ら、次の会議で発表予定の仏語論文を自分で和訳しておかねばならない。二三日昼過ぎに、サンラザール駅で待ち合わせ、列車でノルマンディーに出発。これより一週間、日文研の元客員、オーギュスタン・ベルク Augustin Berque 教授主宰の国際会議「生への存在」Être vers la vie に参加するため、スリジー・ラ・サル城館に在る国際会議場に缶詰となる。

この会議には日文研からも鈴木貞美教授が中心メンバーとして参加し、病後療養のため参加できなかったベルク氏に代わり全体を統括された。その詳細は別途報告されることと仄聞する。また、その後病癒えたベルク氏を中心に、報告書編集も、本稿執筆時点で、最終段階とのご報告を得ているため、この詳しい内容も省く。ちなみに当方の報告は、三木成夫の『胎児の世界』を出発点にして、ベルク氏の提唱する *écoumène* あるいは *médiance* という考えに、発生学的な裏打ちを与える可能性を検討したものだ。

関西大学の木岡伸夫、東京大学の金森修、立教大学の河野哲也、明星大学の上原麻有子ほかの参加者が、フランス側と

言語の障害を感じさせぬ高度に哲学的な議論を交わし、分子生物学者、アンリ・アトラン Henri Atlan をはじめとする大物と渡りあう力量を縦横に発揮した。さらに必要な際の通訳は黒田昭信氏と Eddy Dufournet が高度な内容的確に伝達した。翻訳に問題の発生する用語を日本語と仏語の双方から相互検討するには、両方の言語への習熟が不可欠だ。毎日から相互検討するに、充実した日程で徹底的に議論できる環境は、なにもものにも代えがたく、頭脳が研ぎ澄まされて励起し、日頃では絶対思いつかない発案がつきつぎに脳裏に去来した。だがそれをきちんと文章に書き出す暇がなく、今となっては当日のノートを見ても、もはやその復元は、半分も覚えられない。それが唯一の心残りである。また、たまたまネルヴァル研究会が並行して開催されており、そちらの主催者が日本人研究者であったため、ふたつの研究会で学術交流が促進されたことも、思わぬ余得だった。

スリジーよりパリに戻ったのが八月三十一日。翌朝からはブラジル宛の荷物の発送に追われ、深夜にシャルル・ド・ゴール空港を発ち大西洋を越えれば、翌朝はすでに南米である。

皆様より、過分なご配慮を賜った。

九月二日には空港に菊池教授の出迎えを得た。着便ターミナルに混乱があつて、落ち合うまでに二時間近くを要したが、さっそく宿に向かい、旅装を解き、午後にはサン・パウロ大学日本研究所に出頭し、織田所長、吉田ルイザ奈那教授より、授業の連絡などを受けた。滞在中なにくれとお世話頂いたばかりか、ご家族ぐるみのお付き合いの機会を与えてくださった日本研究所の先生方おひとりおひとりに、この場を借りて深く御礼申しあげたい。

さて、修士課程以上の院生を対象とした日本文化論の授業は、週二回各四時間、全一〇回、計四〇時間の予定だったが、遠方通学者や、平日は建築関係の事務所で働いている数名の院生の都合などもあり、九月五日より週一回、各回早朝八時半より夕刻一七時まで、八時間授業を五回実施、と変更された。この日程では、講師からの一方的な授業では、聴講生の注意力がもたない。このため、以前サラマンカで試みた方法を応用した。つまり午前九〇分二コマは、日本文化論講義、午後の三コマ目は、映像資料を活用した、学生による発表。四コマ目にはそれに基づいた討論、最後の五コマ目には、日本語講読・実践演習。

3

ブラジルのサン・パウロ大学への出講要請は、日文研に客員として滞在されていた織田順子・日本研究所長より、すでに一年以上前から打診を受けていた。このことは、折に触れ、所長および執行部にあらかじめお伝えし、三月の段階で執行部の内諾を経て、六月のサン・パウロ大学側からの最終決定通知を受け、正式に派遣をお認め頂いた。なお当方が二〇〇八年四月より総合研究大学院大学専攻長の職責に就いたため、執行部および所長からは、特段のご配慮を得た。また当方のブラジル出講中には、松田利彦准教授に任じてお願いし、専攻長代行を務めて頂いた。この場を借りて事情を確認し、松田先生には、あらためて御礼申しあげたい。言うまでもなく、専攻長代行依頼は、決して理想的な措置とはいえず、また前例とはなしたがたい変則的な手当てであったことは、重々承知している。だが、法人化以降の様々な事務関係業務・役職の繁忙化にあつて、いかに海外からの要請に的確に応じ、研究協力を円滑に進めるかは、創設二〇年を超えた日文研において、重い懸案であらう。また欧州から南米へと、複数の業務を繋いでの海外公務となったため、旅費の算出などに関しても、交流室の北幸史氏をはじめとする事務方の

朝の講義には、日本から準備していった映像資料を利用して、全一〇回の日本現代文化・美術論。これは近年の傾向として、視覚文化関係の話題提供を要請されたのに応じたものの。

- 1 導入・グローバル化のなかの現代日本美術
- 2 近代日本美術史と西欧との出会い
- 3 ファン・ゴッホ、ポール・ゴーギャンと日本
- 4 近代日本における美術コレクション形成とその政治学
- 5 東洋美学の成立・岡倉覚三と近代アジア
- 6 画家の留学・藤田嗣治とパリそして南米
- 7 国際文化振興の端緒・島崎藤村のアルゼンチン・ブラジル旅行
- 8 中国近代絵画と日本・橋本関雪、豊子愷から張大千へ
- 9 日本とインドの美術交流・荒井寛方とノンドラル・ボース
- 10 戦後の美術工芸と世界・八木一夫を参照しつつ

日本での事前計画はこのようなものであり、それにそって必要な資料を準備のうえ持参したが、ひとことでいえば、こ

うした内容は、現場では学生諸君の興味と接点がなく、すぐにも無効であることが判明した。実際には初日朝一番から、参加した学生諸君の質問攻めにあった。例えばロラン・バルトの『表徴の帝国』はどこまで信頼でき、日本ではどのような反応があったのか、といった質問には、日本における構造主義の受容から、バルトの人形浄瑠璃理解、さらには「空虚な中心」を巡る東京の都市論とその後、といった多様な返答が必要となる。このように多岐にわたる基礎的な情報提供が必要となったため、当初の計画とは大きく異なり、毎朝最初の「コマ目」は、学生の質問に応じて、即興の授業を行うに等しい状態となった。日本研究所の充実した図書は、この際大変に役立った。だが一般論としては、日本語、日本文学・歴史・社会などの基礎的文献はよく揃っているものの、分類が古く、外国人による「日本論」の類は、かならずしも配架整備が行き届いておらず、自前の資料で補完する必要があるが再々発生した。「バルト」に対応できたのも、放送大学教材『表象としての日本』の到来を待ってのこと、ようやく最後の授業においてであった。

これに続く午後の授業での、学生からの自発的な話題提供には、日本文化における「間」の概念に関する専門的な問題

日本語で噛み砕いて説明したあと、日本語能力のない学生のために、英語で再度説明していたが、やがて授業は原則として英語で行うに至った。また討論のセッションでは、英語を基礎として、学生たちのポルトガル語による確認を経てクラスに理解を行き渡らせる、という往復操作が不可欠となった。国際交流基金に現地採用にて勤務の岡野道子さんと、美術史を専攻するマデレーナ・橋本教授のおふたりが、ほぼ毎回出席・聴講し、学生と教師との意思疎通に問題が生じた場合には、的確な補助をしてくださった。

またこの間、Biagio D'Angelo よりカトリック教皇庁大学 PUC-SP で九月二三日に講演を依頼され「日本とラテン・アメリカおよびイベリア・カトリシズムとの出会い(一五四九—一九七三)」と題する話題提供を行ない、質疑応答を受けた(英語講演・ポルトガル語で後追い訳)。この講演の準備には、日本研究所の南蛮関係の書籍、さらには遠藤周作の『サムライ』ほかの英訳、ポ訳が大変役立った。日本語・トゥピ語同系説を唱えた香山六郎は、この講演結論部の登場人物だったが、当方はまことに迂闊にも、USP 日本研究所元所長で、二〇〇八年に国際 NARRA 万葉世界賞を受賞したジェニー・脇坂元教授が、ほかならぬ香山六郎令嬢であるこ

提起や、夏目漱石の『こころ』を専攻する学生からの文学に関する話題提供希望など、多くの提案があったが、討論の話題として以下に絞った。

- 1 中沢啓治『はだしのゲン』原爆被災の表象をめぐる映画と漫画
- 2 ブラジルにおける日本の神道・仏教建築・新興宗教への視線
- 3 からくり人形から押井守の *Ghost in the Shell* へ：日本の独特の機械観？
- 4 Sofia Coppola, *Lost in Translation* (2003) に見る日本像と語り手としての他者
- 5 ロラン・バルト『表徴の帝国』に見るエクリチュールとしての『日本』

実際に授業を担当すると、USP の日本専攻の修士課程学生の多くは、基礎的な日常会話には充分対応できるものの、読み書きにはかなりの不自由があり、実際上ひらがな、カタカナ、漢字は判読不可能に近い者が大多数であることが判明した。また日本語も抽象度の高い語彙は理解不可能なため、

とすら、サン・パウロに来るまで知らずにいた。

脇坂先生は、もっか『枕草子』ポ訳出版準備の最終段階にあったため、清少納言について、いくつか専門的な会話を交わす機会も得た。また先生がリベルダージの日本移民資料館で、九月二十九日に行なった『万葉集』に関する講演に出席する機会も得たが、巻一冒頭の詳しい読解には感じ入った。香山六郎はトゥピ語の語源に沿って「檀原」を「(持ち支える) (光) (太陽)」と音節分解し、そこに「天照大神」の姿を見出した。周知のとおり『万葉集』冒頭の柿本人麻呂の歌には「玉たすき畝傍の山の檀原のひじりの御代ゆ」とみえる。なるほどこの父にして、この娘あり、と腑に落ちた。さらに一〇月二日木曜日には、夜一九時半より、USP 文学部の学部生向けにと請われて、特別授業「ファン・ゴッホと宮澤賢治」を英語にて実施した。

実はこの段階で、筆者は歩行不能状態に陥っていた。この二ヶ月ほどの運動不足が祟ったのか、九月二七日土曜日に宿近くの合気道道場にて、不覚にも右足脛脛の肉離れを起こした。このため、出発までサン・パウロ大学の皆様に迷惑をお掛けした。おりから日本研究所初代所長、鈴木梯一の評伝が出版されていて、外出適わぬなか、一晩で読了したが、こ

の一代の傑物の令嬢が、かつてストラスブール大学やアルザス日本研究所でお世話になった鈴木妙教授であった。愚かなことに、これまたサン・パウロに来て初めて知った事実だった。脇坂先生のみならず、鈴木妙教授にも、当方の事故を氣遣って頂いたが、なるほど妙さんの氣風よさはお父上譲りということをお見受けした。その歯切れよくも上品なフランス語や、威厳あるポルトガル語の秘密、さらには理路整然とした頭脳にも、ようやく納得がいったものである。

4

USPとの契約最終日にあたる一〇月一〇日およびその翌日の一日の二日間にはわたり、「ブラジルと日本…都市モダニズムと今日の文化」がラテン・アメリカ・メモリアルホールを会場として開催された。これはサン・パウロ大学の建築・都市計画学部、レジーナ・マイヤー Regina Meyer 教授をまとめ役に、京都大学の藤原学、同大学に留学中のアンドレア・漆間 Andrea Urushima、国際交流基金奨学生として日文研が受け入れたラクエル・アビリサマ Raquel Abi-Samara が企画したものである。会場は、本年生誕百歳を祝うオスカー・ニーマイヤー Oscar Niemeyer 設計であり、日

本から参加した建築史家たちは、この建築家の代表作探訪が、今回のブラジル行脚の眼目だった。日文研からも細川周平、井上章一、鈴木貞美（発表順）がブラジルに招聘され、これに、ブラジル滞在中の稲賀が現地参加した。日本ブラジル交流百周年事業の一環をなす催しであり、日文研としても公式に参加してしかるべき行事でもありえたはずだが、複数の教授に対して個々別々に招聘がなされた、という形式で事務処理され、日文研として共催の体裁はとっていない。このあたり、海外での展開を含め、公式行事としての認定の手続きや、研究協力の定義に、将来の課題を残す。

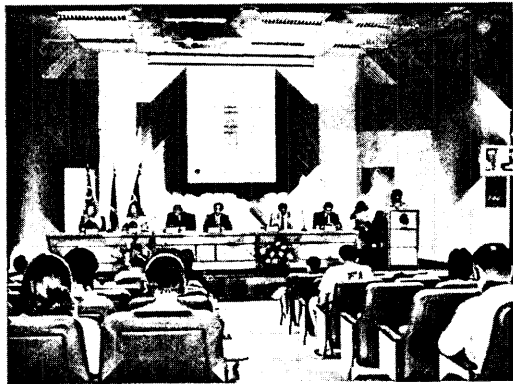
ここでおのおのの発表に触れる暇はないが、東京大学の藤森照信、東京工業大学の塚本由晴が、かたや丹下健三、かたや金沢の町屋再生計画を話題に、映像とたくみな話術を駆使した。通訳を介する不自由をまったく感じさせない闊達な発表をした様が、まさまじと印象に残る。また井上章一は通訳に配慮した周到な話術で、日本での講演に劣らぬ笑いを取っていた。ブラジルではキョウトとはもっぱら除虫剤メーカーの名前として知られており、といった枕を、会社への史上初の現地取材の実体験も織り込んで語り始め、東京人と京都人の差を、サン・パウロのパウリスタとリオのカリオカとの差

に類比する是非に及ぶ。ご当地ものの話題を巧みに按配する論理展開のお手並みなど、海外での講演の見本を見せつけられる思いであった。その一方、細川は明快なポルトガル語で、文学に現れた日伯の交流とその展開を、日系移民文学の登場人物の類型変遷に探った。さらに鈴木貞美は、堀口大学の父でサン・パウロに公使として滞在した九萬一の活動と『現代ブラジル文学代表作選』（一九四一）の文化史的な意義を敷衍した。初日の最後には、まず小池昌代による詩の朗読、つづいて吉増剛造夫妻による詩と映像のパフォーマンスが行われ、聴衆の喝采を受けた。なおこの会合のプログラムは、ポルトガル語版は印刷物が配布されたが、日本語版は印刷に重大な不備が発見されたため、結局配布されないままで会期を終了している。

5

週末を挟んで一〇月一四日から一六日と、今度は日文研とサン・パウロ大学 USP 共催で「ブラジルと日本の文化交流…言語、歴史、移民」が開催された。稲賀は現地先遣要員として、より実質的なお手伝いをせねばならないところだったが、歩行不如意な状態であって皆様の足を引っ張る仕儀

となった。準備段階から分かっていたことだが、日本研究所講堂が改装工事の遅延のため使用できず、やむなく借用した獣医学部の講堂は、設備こそ整っていたが、バスを入り口に付けることが動物病院の運営規定上できず、また借り上げたバスの運転手が広大な大学構内の交通規制に通じておらず、加えてパウリスタ大通りにほど近いホテルから市街西端の大学構内まではかなりの距離があり、市内の交通渋滞など予測し難いことも加わって、舞台裏では様々なトラブルが発生した。こうした日常茶飯の障害を織田所長以下の USP 側は見事に解決したが、バスの借り上げなどの案件は、一言ブラジル側に前もって相談しておいてくれれば、といった声が森幸一教授から漏らされた。森先生は、これに先立つ大阪大学との共催企画でも、調整に苦心を払った経験をお持ちだったが、少なくとも金銭の絡む契約については、事情の分からない日本側で手配するよりは、現地ブラジル側に交渉を一任された方がなにかとスムーズに進むはずで、と助言されていた。日文研ご一行の宿泊地となったブルー・ツリー・ホテルは、眼下に近代美術館を見下ろす一等地にあるが、由来は青木商店。当方が一月半厄介になった「場末」(1)のビジネス・ホテルとは雲泥の差だったが、現地交渉すれば、「日系」ゆ



サン・パウロ大学でのシンポジウム

え宿泊費も正規料金よりはるかに安くなるのだ、という。

一四日午後は開会式に続き、基調講演。まず細川周平教授が、近著で読売文学賞を受賞した『遠くにありてつくるもの』周辺の話題を、移民史概要、コロナ文学鳥瞰、近年のお祭り文化の実地調査の三点に分けて、わかりやすく整理。移民文学百年史を詳細に綴ったお手製の年表は、将来にむけての研究のための里程標となる。つづく二宮正人USP教授は、東京大学法学部博士号を持ち、美智子妃の著作『パールより…子供と本を結ぶ人たち』や、移民百年を記念してTV番組にもなっ

た『ハルとナツ』を、ソニア夫人とポルトガル語へ共訳で刊行した著名人。「ブラジル人労働者と日伯間の法的協力」と題し、二宮教授はとりわけ一九九〇年の法改正につづくブラジルからの日系子弟の日本への大量逆移入と、そこに発生した社会問題や犯罪にまつわる法的問題を、弁護士としての実務体験、ブラジル政府側の法的協力問題審議員としての立場を踏まえて、具体的に詳述した。

検討された具体例は膨大だが、例えば日本人とブラジル人との間で離婚が発生したあとの養育費支払いのトラブルでは、不払いがブラジルの法律では禁固刑に相当するのに対して、日本側には財産差押えの強制力がない、など法律に落差があるのだという。これに国家間の煩雑な手続きが実効性を殺ぎ、仮に裁判に持ち込めても欠席裁判では勝訴したところで支払いなど期待できないという現実が、執拗な障害として介在する様も浮き彫りにされた。刑法上の問題では、強制送還規定が日伯間に締結されていないことを振り出しに、仮に制度が整備されたところで、未決案件が七千件を超えていて、到底対応などできない現実、静岡での二歳児死亡事件のあと、日本では七〇万の署名が集められたが、だからといって、日本の議員団の圧力でブラジルの法律を改正するわけに

はゆかぬ主権問題、さらに未成年者については、ブラジルでは最近三〇年で日系の感化院収容者はわずか六名にすぎないのに対して、日本では入所者のなんと一〇割強が日系ブラジル系子弟で占められ、同じく未成年の禁固刑服役者では、ブラジル全土で日系はわずか三名のところ、日本では四九〇名からのブラジル日系人が禁固刑に服している、など、世間一般には知られていない、著しい不均衡が指摘された。母国での優等生集団が、日本に来てこれだけの比率で犯罪者扱いされ、教化施設送りになるとすれば、そこにはなんらかの構造的な力学が作用しているものと見なければなるまい。(なお以上の数字などは、半年前のメモに頼っているため、正確を期しがたい。詳細は、報告書刊行をまって、訂正させていただきたい。)

折から『すばる』誌上二〇〇八年八月号の『日系』と文学特集に、細川周平が西成彦と充実した対談を寄せ、ブラジルの日本語文学が消滅の瀬戸際にある歴史的必然を分析していた。そのひとつ前の七月号「ブラジル移民百年」には、北米在住者カレン・ティ・ヤマシタの「紳士協定」や今福龍太「移民の声の共同体」の傍らに、たまたま萩野アンナの「蹴る女」が併載されていた。日本社会にあって異質なブラ

ジル系移民がいかに見事にオチコボレになってゆくかを、スラップスティックの誇張を交えながらも、著者のフランスでの外国人登録の実体験や、二重国籍ゆえに経験した理不尽をも踏まえつつ描いた抱腹絶倒の傑作といつてよく、ここに二一世紀多国籍文学の文脈での、あらたな日系移民文学の将来と、ブラジルから日本へと再度戻ったニッケイの運命を見ることができらるだろう。

6

一五日の会合では、リベルダージ地区にある日本移民資料館に長らく関わってきた本山省三教授の談話が、戦前から戦後の移民社会の様子と、安藤全八や鈴木梯一などに代表される中心人物たちを回想して貴重だった。だがそこでいわずに逸話的に触れた人々の生き様は、文化人類学者、森幸一教授が示した移民社会の年代的構造的変化という舞台のうえに載せると、さらにくっきりとした輪郭を描く。一九四二年に太平洋戦争勃発とともに、日本とブラジルとの国交が断絶された時点までに、延べ一八万八千人を超える移民がブラジルに來ているが、それに先立つ三八年の外国語教育禁止令施行の段階で、日本人学校四七〇校が閉校となっている。もちろ

ん規模に大小はあろうが、これだけの数の教育機関の舵取り次第で、日系コロンビアの帰属意識が大きく転換されたことは、想像に難くない。

そのうえで、移民の置かれた状況の経年的な変化をみると、まず戦前期にあつては、一九〇八年から一〇年代半ばまでは、いわば一攫千金を夢見た出稼ぎ意識が強かったが、一〇年代後半には自営業への志向が高まり、またそれと並行して子弟をブラジル社会に適応させる必要が痛感されると、日本語とともにポルトガル語教育の必要も見えてくる。この段階ではまだ永住主義は少数派だが、ブラジル社会での栄達を目指すならば、高度のポルトガル語運用能力は不可欠との認識も広がった。ここで「和魂伯才」モデルが確立し、日本の国定教科書を用いた日本語による国語・修身などの教育と、道具としてのポルトガル語教育との並列による、バイリンガル体制が実施される。だが三〇年代後半から、ヴァルガス政権による国家主義のもと、ブラジル側では移民同化政策が強化され、これがやがて外国語教育の禁令に結びつく。他方で、ブラジル移民にもきちんとした日本語教育が必要と見る、遠隔地「日本臣民」形成を煽る、日本からの圧力も高まった。この対立のなかで、戦争期には公の場での日本語教

育が禁止された。この状況が、戦後すぐの「勝ち組」「負け組」の対立や「臣道連盟」による負け組へのテロ発生の温床となったことも容易に理解できよう。

五〇年代以降になると、二世世代には日系性からの逃避傾向が顕著となり、これに伴い、日本語教育への執着も弱まり、七〇年代に入ると、家庭から日本語が消滅する現象も発生する半面、マイノリティとしての意識の高まりから「権利としての日本語」さらに八〇年代以降にはグローバルイゼイションのなかで「資源」としての外国語の価値が見直され、日本への「デカセギ」の増加もあいまって「外国語」としての日本語教育、という視点が登場する。九〇年代には祖父・祖母の世代への心情的な一体性を求めた「継承日本語教育」という新たなモデルが登場した、と森は観察するが、この価値観が留学生受け入れ側の日本でも、愛知県や三重県の実地現場で観察されたことを、筆者は思い出す。

三〇年代の移民船に取材した、石川達三の『蒼氓』には昨年ようやくポルトガル語訳が登場したが、それは、ひとたびは日系移民への蔑視だと批判されたこともある小説が、ようやくリヴァイヴァルを果たした、というだけのことではあるまい。この古典を改めて読みたいという心情的欲求をもった

日系のいまや第三世代、第四世代以降の子弟には、もはや日本語原典ではこの小説を読むことが出来ない。その否定したい現実が、ここには顔を覗かせている。

以下端折らせて頂くが、一五日午後には、大学院生の若々しい四編の発表に対して、井上章一教授が、暖かくもときに厳しいコメントを寄せる、教育的配慮溢れるセッションが、充実を見せた。翌日の一六日には、午前「日本文化の受容と浸透」、午後には「日本的エロティシズムの表現」というラウンド・テーブルが設けられた。早川聞多教授とともに、メキシコから参加のアマウリ・アレハンドロ・ガルシア教授、地元のマダレーナ・橋本教授による浮世絵春画研究は、機知の分析、哲学的考察に演劇的再演という三人三様の方法論の差異を際立たせ、きわめて刺激的なセッションとなった。最後にはジュニー・脇坂元研究所所長のNARRA万葉世界賞受賞記念の祝賀がなされ、八〇歳を越えて文学研究への情熱をなお静かに燃やしつつける脇坂夫人への、一同の敬慕の念がひしひしと伝わる幕切れとなった。

7

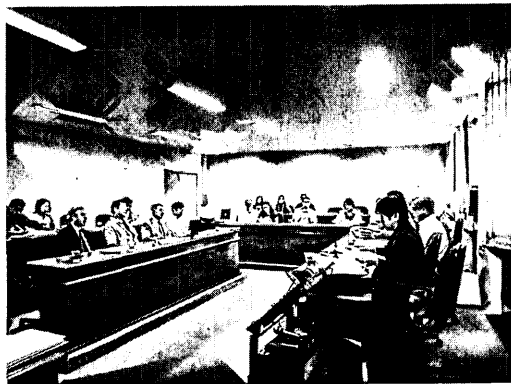
サントスの港まで半日の遠出をし、コーヒー取引所跡の博

物館で日系移民の展示を見学し、海岸で笠戸丸の記念碑を見たのが、はたして翌日の一七日であったのかどうか。この間あまりに多忙だったとみえて、日誌には何の記載も残っておらず、遺憾なことに判然としない。展示のなかには、当時の移民振興のポスターで、サン・パウロ州全体が、北海道を除いた日本列島の総面積に匹敵することを図示した地図や、鉄道の延長状況や日系入植者の人口を、入植地ごとに円グラフで図示した大型地図などもあって、興味が尽きない。

サントスより夕刻に戻った一七日午後、稲賀はリベルダージの日系移民資料館を細川教授と訪れ、閉館まで一次資料の閲覧を許された。岩波菊治の事跡、一九五四年のサンパウロ市制四百周年を記念して、イビラプエラ公園に堀口捨己設計の日本館が竣工した経緯などが、短時間のうちに明らかにになってゆく。さらに永田稠による「力行会」の動向は、孫の翼さんと連絡が取れ、このあたりの人脈もようやく掴めてきたところだった。また、神戸の甲南大学の創始者として知られる平生飢三郎は、神戸の移民収容所の設立とも密接な関係をもつが、その平生は一九三五年に再度ブラジルを視察し、大恐慌の後、コーヒー価格が三年の霜害で大暴落するなか、日本人移民に棉花栽培を奨励していることが判ってき

た。サン・パウロ州の綿花収獲は一九三二年には一万トンであつたものが、一九四六年には四四万トンと、著しい進展を見せている。これに対応する記事は、石川達三の『蒼氓』のなかにも、船中での再入植者の弁として語られているところで、両者は見事に符合する。あと数日の余裕があれば、ずいぶん調査が進むのに。これで早や、サン・パウロを後にせねばならないのが、いかにも残念であつた。ちょうど相前後して、今福龍太がサン・パウロ来訪との報も森先生から伺つていた。今福氏は、これも本年百歳を迎えたクロード・レヴィ・ストロース Claude Lévi-Strauss との共著となる『サンパウロのサウダージ』の刊行準備最終段階。そうした旺盛な執筆力に到底伍しえない自分が、はなはだ情けなかつた。

移民資料館の本棚には、土橋利彦の *Adios Pampa* もあつた。その歌詞訳文「さようなら、私の好きだった大平原よ。私はもうお前の知らない土地に行かねばならない」が当日の当方の心境だといえ、あまりに感傷に過ぎるだろう。安藤全八の故郷が広島市五日市と『伯刺西爾時報』の死亡記事に見えたのが、広島育ちの人間の心にと感応したのかも知れぬ。ブラジル滞在二ヶ月にして、ようやく戻る故郷なき移民の境涯が、わずかながら実感され始めていた。



リオ・デ・ジャネイロ連邦大学での会合

より極端な少数派である。教職員のみならず学生まで一丸となつてストに突入しているなかで、外国の機関と共催で公式行事を催したのでは、スト破りと指弾され、学部内の反発を煽る恐れがある。実際数年前に同じような状況下で、アメリカ合衆国の大学と共催で開かれた会合があり、そのときの主

セッションをもつ予定であつた。ところが九月後半から地方選挙ほかの政治情勢下で、リオ州立大学は全面ストライキに突入した。常習犯のサン・パウロ大学がストに入らなかつたほうが珍しいなどという噂も耳にしたが、リオ州立大学の場合、日本語担当部局はもと

一〇月一八日土曜日にリオ・デ・ジャネイロに移動。一九日曜日と週末は束の間の休息のはずだったが、折からの悪天候に見舞われ、終日の風雨のなか、ホテルに足止めの状態となる。この間、日本からは大学院関係の書類やら *Japan Review* 査読の要請などの締め切りが次々と舞い込み、これらの書類への対応に追われるままに毎日が経過した記憶しかない。移動日夜半より、井上章一氏が食あたりか、体調を崩し、二日ほど絶食状態となり、リオ・デ・ジャネイロ連邦大学 UFRJ における会合には出席を見合わせて頂いた。

こうしたいささか暗く湿ったリオ滞在のなかで、唯一の息抜きは、細川蹴平 (!) の先導で扇動 (?) で「聖地」マラカナン競技場に出向き、フラメンゴ対ヴァスコの夜間試合を、弱小必敗のヴァスコ陣営から観戦したことだろうか。往年のサッカー少年たちは、桁違いの応援合戦と、喜怒哀楽丸出しの現地の感情表現にいささか戸惑いながらも、スタジアム全体が歓声に波打つような独特の雰囲気を感じた。

二一日の「リオ連邦大学におけるブラジルと日本の出会い」は、同大学の富永由美子教授の采配で急遽組織されたもの。当初の計画ではリオ州立大学の日本語担当者と共に一日の

催者は声高に糾弾される結果を招いた、とのことであつた。

このような事情で、一時はリオへの遠征そのものの中止すら取り沙汰されていたところ、富永先生の文字通りのご尽力で、連邦大学に舞台を移しての会合が実現することとなつた。細川教授のポルトガル語での主旨説明、在リオ・デ・ジャネイロ総領事館広報文化センターの石井清史氏による挨拶に続き、日文研側から、細川、鈴木、稲賀、早川、バクスターの各教授が、手短かな研究紹介。休憩をはさんで、州立大学側が同じく研究動向を披露し、そのあと討論を経て懇親会に移るといふコンパクトな日程であつた。意見交換で活発なやり取りのあつたことは記憶しているのだが、どうしたわけか当日のメモが紛失しており、その内容もすでに記憶から消えて去っている。ただ大著『日本の生命観』を要約した鈴木教授の質疑応答での返答だけが、記憶に残る。臓器移植に関する議論が盛んだつた九〇年代には、日本ではもっぱら脳死の定義の妥当性に関する是非が問われたのに対し、欧米では中絶・堕胎や老人の安楽死の是非が論じられる。日本が死に拘るのに対し、欧米は生に重きを置く。そこには顕著な位相差が目撃された、というのである。それは何を意味するのか。ようやく晴天となった翌二二日、早朝の束の間の時間を盗

んで、事務方有志数名と、コルコバード山頂の、海拔七〇九メートルに位置する、巨大な十字架像まで駆け足で登攀し、大急ぎで下山。昼過ぎには空路にて帰途に着いた。フランクフルト経由、日本到着は一〇月二四日朝となる。

今回の旅程では、事務方からは佐久間部長、仲井、桐山両課長に北幸史氏のご参加を得た。あらためて外国出張先での有益な補佐に御礼を申しあげる。とともに、業務以外の時間には、団体行動は事実上皆無という、日本のお役所の一般的行動の慣例からは大きく逸脱した、独立心に富む派遣団一行であったことも、書き付けておきたい。なおこの間、京都の日文研のほうの事務が休止状態に陥るのではないかと、猪木所長が深刻な懸念を表明されていたことは、ここに忘れず一言追記しておきたい。どのような事務担当構成と教員配置が、こうした外国派遣において最適なのか、多忙を極めるばかりの国内業務のことを念頭に置いて、少ない人材を有効活用する方を、さらに見極めてゆく必要があるそうだ。

いまひとつ、サン・パウロでの会議については、ポルトガル語版はUSPから、日本語版は日文研の海外シンポジウム

報告書での体裁による公刊が、現地で細川団長と織田所長とのあいだの合議で決定された。報告書刊行にまつわる学術的・行政的な要請は、国際的な催しでは、相手方次第でそのたびに変化する。柔軟な原則に基づき、実際の合理的な割り振りを設定されたおふたりの理性的な判断に、あらためて感謝を申し述べたいと思う。

さらに、日文研を基盤機関とする総合研究大学院大学の国際日本研究専攻では、学生の海外調査費の利便が配慮されている。然るに今回、大学院生からはひとりの参加者も得ることができなかった。せっかくの助成制度をより円滑に活用するのも、将来の課題である。

最後に、これも書くとお前だけのことではないだろう、とお叱りを受けそうだが、八月以来の日程にもまして、帰国後は公私あまりに多忙にわたり、まったく執筆の暇を得ぬまま、いつしか半年以上がたってしまった。ブラジル滞在は、すではるか昔の出来事のように朧ろで、もはや記憶の細部が蘇らない。大量に発送したはずの電子メールも、なぜか消滅しており、当時の記録は跡形も残らない。なんとも臨場感のない出涸らし同然の南米報告に終わった。お詫びしたい。

(研究部教授・総合研究大学院大学国際日本研究専攻長)

日文研 四十三号

二〇〇九(平成二一)年九月三〇日発行

編集 細川 周 平

発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国際日本文化研究センター

住所 〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町三丁目二番地

電話 (〇七五) 三三五―二二二二

ホームページ <http://www.nichibun.ac.jp>

印刷 中西印刷株式会社